

J・デューイの習慣論と道徳的判断の問題

谷口, 忠顕

<https://doi.org/10.15017/1397654>

出版情報：哲学論文集. 18, pp.27-45, 1982-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

J・デューイの習慣論と道徳的判断の問題

谷 口 忠 顕

序

J・デューイの経験的自然主義の立場は、「経験」概念が「習慣」と「探究」の両原理によって構成されている点に其の特徴がある。即ち彼の経験概念は、その習慣論における極めてユニークな社会心理学的分析と、その探究論における思考と行為とを統合する論理的吟味とによって、伝統的経験論と異なった能動的認識論の上に立つ連続観的視点に基づくものである。この「習慣」の原理と「探究」の原理は、個人と自然的・社会的環境とが相互作用する独自の「状況」(Situation)に直接関係するものであり、生長し発展する「動的自我」(Dynamic Self)の両輪ともいえるものである。

われわれは先ずデューイの習慣論の特徴を吟味し、同時に彼の探究論の基本構造を把握することを介して、両原理の交差する焦点となる「状況」の道徳的特質を考察したい。「状況」が道徳的判断を要求するとき、それは習慣のパースナルな性向

・素質 (Disposition) と探究によって明らかにされた「状況」の客観的事態との絶対的な相互的決定を行う形での統合的な判断を求めていることを意味する。この道徳的判断は、状況の事実判断と価値判断とを統合して含み、行為の結果に関する予測的判断を含んでいる。その際、判断者の性向・素質による情緒的感得力 (emotional sensiveness) が、判断内容の決定に与える影響が考慮されなければならない。

〔一〕「習慣」の原理

デューイの経験概念は、基本的には「探求」(Inquiry)の方法を基軸とする「習慣」(Habit)であり、探究としての習慣であるといえる。或いは探究的知性に支えられた習慣、いつでも探究の方法が具体的に適用されるような習慣であるともいえる。デューイのいう「経験」は人間の活動様式からいえば習慣の原理と探究の原理によって構成されているが、認識面からの形式的原理でいえば「連続性」(Continuity)の原理と「相互作用」(Interaction)の原理として捉えられる。即ち個人が環境との間に経験する時間的・歴史的関係が「連続性」であり、空間的・地理的關係が「相互作用」であり、これらタテとヨコの原理が状況において交差して働くところに経験の場を構成するのである。経験が真正な意味において経験といえるのは、習慣が固定的反復に陥ることなく、絶えず「生長の連続性」(Continuity of Growth)に沿って自己更新の継続的適応を営むときである。かように経験の本来の意義は、絶えず生長進歩のプロセスとして、且つ自己と環境との再調整・再適応の動的習慣として理解されるのである。この意味で「習慣は、唯環境に對する調整であるばかりでなく、環境の調整である」⁽¹⁾。従って又、デューイの「自我」(Self)は習慣の束であり集合体であるとする点で、D・ヒュームの伝統を受け継ぐものである。しかしデューイの自我論が伝統的経験論のそれと大きく異なる点は、習慣が慣習の影響によって社会的行動様式を優先的に含むとする点であり、又経験概念が思考作用と実験的行為との統合的機能として把握される点であり、更に自我を「静

的自我」(Static Self)として分離的・孤立的・固定的に捉えるのではなく、あくまで成長し、拡大し、解放された「動的自我」(Dynamic Self)として把握せねばならないとする点において等である。経験が生長のプロセスを歩み「後続の経験のなかに多産的に且つ創造的に生きるような現在の経験の選択」²⁾を可能とするためには、習慣の固定化を防ぎ、「探究」の方法による科学性、客観性、能動性、予測性等の特質を導入することにある。別な言い方をすれば習慣が創造性、社会性、合理性の様な特徴によって着彩される為には、各々の習慣が絶えず探究の方法によって吟味され整理づけられて新しい質を帯びた「調和的習慣」とならなければならない。探究的知性を背に帯びていない習慣は真正な経験に値しない。それは惰性・くせであって、後続の経験に如何なる建設的・創造的影響をも与えない。「習慣の基本的特徴は、行われ且つ受けたあらゆる経験がその行い且つ受ける本人を修正するということであり、他方またその修正がそれを欲すると否にかかわらず、その次ぎの経験の質 (quality of subsequent experiences) に影響を与えるということである」³⁾習慣が絶えずバランスの再調整を営み、自己刷新と環境的条件の改修を含む経験の質の更新を営んでいる間は問題はない。それは適度に知性に裏付けられた習慣である。しかし習慣が生長し進歩する方向とは逆の方へ惰性化し固定化してしまう危険が絶えず潜んでいる。ここに道徳の問題がある。「完全に仕きたりに墮した習慣は、じつにうまく思考力を封じこめてしまうから、思考力はもはや不必要となるか、不可能なものになる。仕きたりを事とする人の進む道は、抜け出ることの出来ない溝のようなもので、その両側は彼を包囲し、その進路を完全に定めるため、彼は最早や自分の通るところを考えたり、目的地を考えたりしなくなるほどである」⁴⁾習慣が「現在の経験」の意味を増すように行動せよという進歩の原理から全く外れてしまつて、働きに滞り (fitch) が生じた場合には新たに思考作用が求められてくる。それは何らかの解放的行為が求められている「道徳的状况」(Moral Situation)でもある。この道徳的状况において習慣の原理は、どのように探究の原理と呼応し合い、修正し合い、相互的調整をし合いながら、新たに習慣の流れを回復するのか。両原理の機能は如何にして道徳的判斷の成立に関与するのか。これが本論の主題である。

先ず習慣の構造的特質から吟味するが、その際デュイイは習慣の原理として何か固定した習慣の法則を導こうとするのではない。何故なら彼の連続観は、あらゆる固定した思考内容や体系的価値づけ、或いは分離観的認識の仕方を拒否するからである。それ故にこそ、彼は性格と行為、動機と結果、意志と行為等の合一を主張するのである。

習慣の多様な特質のうちで何をデュイイは最重視したであろうか。例えば習慣の含む推進力であろうか。技術的能力であろうか。機械化 (Mechanization) か。習慣の斉一性か。これらは何れも習慣の重要な機能ないし特質を示している。しかしデュイイのいう習慣の最も本質的機能は、その性向ないし素質 (Disposition) の形成にある。デュイイ習慣論における此の素質ないし性向の意義を知ることが、彼の倫理説や教育哲学の最も重要な構造的核心を把握することに連がる。この素質ないし性向は衝動・本能という経験の最小の構成単位から形成され、そこから具体的習慣の諸行為が現実に表示される。衝動の粒子群は普通、過去の経験から育ってきた性向・素質の含む主観的傾きの方向に沿ってコントロールされて、行為となって現われる。しかし衝動の粒子群が直接に性向や素質を無視した形で行為の表面にあふれ、いわゆる衝動的行為として爆発することもある。従って、これらの衝動群の調整こそが知性の本質的役割となり、衝動を一定の行為に形成するとき自然に無意識的に性向や素質が形成されるのである。デュイイ習慣論における性向・素質の中核的役割は、それが習慣を形成する潜在的無意識的な、隠れた力として社会的機能を果たすものである。習慣はこの様に衝動、性向、行為という三つの層の重層的構造ともいえるもので、習慣の表面に具体的行為があり、最下層に爆発的な衝動があり、中間には性向・素質が両者の橋渡しを演ずる位置にある。

根源的な活動エネルギーとしての衝動が状況が求める行為のパターンに従って、その可塑的特性から性向・素質へ組織づけられる。「どんな衝動も周囲の環境と相互作用する其の仕方いかんに応じて組織づけられ、殆んどどんな性向にもなるかも知れない」⁽⁵⁾。衝動の可塑的特性が環境への作業的適応の仕方によって如何なる性向へも育ち得ること、即ち衝動は社会的条件の影響によって社会的知性を求める善き性向へ発展する可能性を含んでいる。「われわれは社会における心理学的要素を論

ずるに先立って、生まれながらの活動力を教育し、明確な意味深い性向へ仕立てあげた社会的条件について知る必要がある。⁶⁾ 習慣を一般的にどの様に規定するかは、様々な把握の仕方が考えられるが、デューイにおいては習慣が欲望と合して「推進力」(propulsive power)であり、「技術的能力」(technical abilities)であり、「ある種の活動力に対する要求」(demands for certain kinds of activity)である。習慣の中核的本質を性向・素質だと見るデューイは、「全ての習慣が性情(affections)であり、人は全て発射力があり、漠然としたありふれた意識的選択に比べて、たくさんの特定の行為によって作り上げられている一つの素質(predisposition)の方が、はるかに深く根本的なわれわれ自身の一部だということである。⁷⁾ 性情(affections)は性向(disposition)と同じく多くの行為によって形成された「態度」(Attitude)のことである。「いろいろの方面の行動の方向とその行きつく先きとを、直接に一見本能的に感じると言うことは、実際には直接意識下に働いている習慣を感じ取ることに外ならない。⁸⁾ この「感じ取る」(feeling)とは勘であり、無意識的な、行動の判断に際しての直感的能力ともいえるが、この積極的に感じ取る力を含むのが、Disposition である。Disposition の機能は、Sensitiveness (感得力) をその本質として含む。「習慣の本質は反応の仕方なり様式等に対する後天的素質であって、特殊な行為に対する後天的な素質ではない。但し特別な条件のもとで、こうした特殊な行為が一つの行動の仕方を表わしている場合は別である。習慣というのは、特定の行為の単なる再発というよりも、むしろ或る種の刺戟に対する特別な感得力ないし近づき安さ、一定のえり好みや反発を意味するものである。習慣とは意志である。」⁹⁾ 習慣の本質が、おさまりの反復にあるのでもなければ特定行為の再発にあるのでもなく、性向・素質であり、態度にあるとする点は、デューイ習慣論の核心であり、特異な論点でもある。而もこの性向・素質の積極的機能が鋭敏な「感得力」にあり、受身の感受性ではない。「習慣」という言葉の代りに「性向」とか「態度」を使用しようとしたのも、それが「何か潜在的な、潜勢的なものを暗示し、これが能動的なものとなるのには、態度と性向との外側に、一つの積極的な刺戟を必要なもの暗示している」¹⁰⁾ からであり、性向や態度の言葉の方が抑圧されているが機会があれば、いつでも外に解放されるニュアンスを含んでいるから、「習慣」の語より適切であるという。換言す

ればデューイは習慣の本質が外に現われた特定の行為にあるとせず、あくまで潜在的な、いつでもチャンスがあれば行動の表面に勢いよく飛び出るのを待ち構えているようなもの、即ち性向、素質、態度にあるとみるのである。受けている圧迫が排除されて機会が来れば、「特定の仕方で、大っぴらに行動しようとする用意のあること」「扉が開いたら直ぐにも飛び出そうと待ちかまえている性向」¹¹⁾と表現している。この様に性向の受動的な潜在性の性質と同時に、性向の能動的な力動的構えが注意されなければならない。即ち、性向の特質は、その**潜在性**、刺戟に対する積極的反應の感得力や状況が含む具体的目標に直ぐ馴染み安い能力が持つ**力動性**、更に好みの方向へ快の方向へ進もうとする**主観的傾き**などがある。換言すれば性向は、行為に現われる以前に無意識的に行為の下層に形成されているものとしての潜在性、状況を積極的に把握洞察し、いつでも習慣の行為となつて表面化しようとするエネルギーを持つ力動性、自分好みの選択的行為へ傾斜しようとする主観的傾きなどがある。この主観的傾きが一定の対象を持つとき、性向が興味(Interest)を形成する。自我はInterestの多様な構成要素からなるともいえる。性向とInterestの違いは、後者が或る特定な対象へ向かうのに対して、前者は様々な対象に対してどの様に対応し、反応するかという一般的傾向ないし態度を指すのであって、この性向・素質の特質は豊かで自由な柔軟性、多様性、感じ安さなどにあつた。性向・素質には常にこの様な特質が含まれていることによつて「注意力の固定化」を妨ぎ習慣におけるバランスの機能が豊かに果されるのである。

次に性向と衝動との關係を考察してみよう。デューイ習慣論は、その根に衝動論を含む。衝動の特質に関して「衝動とは未知なるものへの運動(the movement into the unknown)であつて、全体としての未知なるものの無限の空間への運動ではなく、その未知なるものがうまく見付かれれば秩序と統一との或る行動を回復してくれる、あの特別な未知への運動である」¹²⁾は、その未知なるものへの運動(秩序と統一を求める運動である。即ち各々の場面での衝動の発生は、実は各々の場面で衝動が其の場所特有のバランスの調整に与ることである。衝動とはバランスの欠如分を補おうとする運動であり、個人と環境の相互作用の崩れた側面を修正しようとする適応の動きでありエネルギーである。デューイは衝動を定義して「融合を回復せんとする欲求」

(desire for restoration of the union) と規定する。「融合」(union) と「統合」(Integration) と同じであって、相互作用における崩れたバランスの側面を修正刷新することである。状況はどれもユニークで、その内容は刻々と変化し、個人も環境的要因も発展的に変容する。従って新しく修正されたバランスの輪は一層豊かな質的变化を含み、生長の規模も大きくなっているべきである。デューイ衝動論の一つのポイントは、衝動をあくまで個人と環境との相互作用する場の特性との関係で捉えようとする点に特徴がある。状況の性格によって衝動の強き弱さの程度の違いも、内容の質的相違も生ずるのである。

デューイは衝動をあくまで個人を取巻く環境との関係において把握するが、それは個としての生物有機体の状態が絶えず変化し、環境的条件も変化するのに応じて、生まれつきの活動力も変化してゆく。衝動と有機体全体との連続、衝動と環境的条件との連続を前提とする。衝動自体は状況が如何なるものであれ皆同じ「生まれながらの活動力」(native activities) であり、「根源的な活動力」(Original activities) である。「生まれつき持ち合わせている本能は、実際には何処でも同じである」¹³ 又「習慣の無数の多様性も、実際には生来の本能の同じ資本蓄積から出てくるのである」¹⁴。しかし衝動がどの様な現われ方をするかは、環境との相互作用に依存する。「人を真に人間らしくする教育とは、社会的状況の持つ可能性と必然性とに光を照して、生まれながらの活動力を理的に指導することにあるからである」¹⁵。衝動が環境との相互作用を介して多様な現われ方をするが、それは組織づけられて何れの習慣の形成も可能であるという。この衝動の特質をデューイは「衝動の可塑性」(plasticity of impulse) 又は「本来の変更可変」(Original modifiability) と呼ぶ。この可塑性の故に、あらゆる性向と習慣の方向づけが教育によって児童の生長のために、役立つのである。「子供の嬉々とした獨創性」(the delightful originality of the child) も、この衝動の特質に基づくものである。衝動が行為において占める地位についてデューイは次の様に定義する。「習慣における再調整・再組織の枢軸としてみたとき、行動における衝動の地位は、一方で衝動が阻止され、外皮に被われた習慣の領域とは区別される。他方また衝動は思い通りなことの出来る地域とも区別される」¹⁶。この定義から分かる様に衝動は固定化した習慣的領域と自由勝手気ままな発散の領域との中間地帯にあり、それはどちらの側にも直ぐ侵攻できる領域

にある。従つて衝動が一方で固定化され硬直化されないようにすると共に、他方で自由奔放に陥らないようにしながらバランスのとれた習慣を形成し、その活力の源泉となることが求められるのである。「衝動は解放の源泉であり、不可欠の源泉ではあるが、しかし唯、習慣に適切さと新鮮さとを与えるのに使われたときにだけ力を解放してくれるのである」¹⁷⁾このことから旧い情性化した習慣を再調整・再組織するために衝動と本能とを利用するのである。習慣を絶えず生き生きとした新鮮さを以つて創造的なもの・合理的なものとする基本的素材は衝動群である。真に人間性を解放することは、衝動の解放に外ならない。衝動の調整こそ全ての鍵である。この衝動の調整と関連して衝動の解放の方向に次の三つの型が考えられている。

(一)衝動の直接的解放性、又は直接の充足性、(二)衝動の間接的解放性、又は屈折的変容性、(三)衝動の抑圧的潜在性、又は抑圧的沈澱性。第一の直接的解放性とは、「衝動活動力は波打ち、爆発して、解放されることがある」¹⁸⁾「それは盲目で、理知的ではない」¹⁹⁾第二の屈折的変容性とは「衝動活動力は昇華されることがある。——言いかえれば、一つの要因として他の諸因子と理知的に調和し、一つの連続的な行動形式になることがある」¹⁹⁾第三の抑圧的潜在性とは「爆発も出来ないし向きを変えすることも出来なければ、それは内向して、人目につかない地下の生活を送るようになる。抑制されることがある」²⁰⁾第一の直接の解放・爆発が許されない状況にあるとき「探究」の原理が求められ、衝動の調整が行われなければならない。自己と環境との相互作用を営む「状況」全体を変革する行為を探るか、或いは衝動自体を(二)の間接的な形で方向転換させようとしたり、昇華させるかである。何れにしても個人の衝動は、そのままの形でストレートに解放することが許されない場合が多いから、そこに衝動を如何なる形で解放するかという道徳的判断が求められる。それは状況を完全に生きようとする行動の仕方を探る判断である。こうして道徳的判断の在り方は「状況」において衝動をどのように活かすのかという「探究」的思考と、習慣の中の性向・素質とが相互作用するうちに成立するのである。道徳的判断が必ず求められるのは、習慣の流れのうちに問題の場面が発生し、それを再び習慣の流れに乗せるためである。それは習慣の再調整・再修正ということであり、具体的には衝動の導き方にかかっている。「自由になった衝動と道徳上、相関関係にあるものは、直接の活動力ではなくて、性・向を更新

し、習慣を組織し直すのにとのようにして、衝動を用いたらいいか、その用い方に対する反省である。」²¹ 即ちデューイのいう要点は、道徳の問題は習慣の再調整のために衝動を如何に方向づけするか、その判断の問題になる。衝動の解放は知性の役割であり、道徳的判断の在り方にかかっている。

〔二〕「探求」の原理

われわれが「生長の連続性 (Continuity of Growth)」に沿って時間的歴史的な連続性の原理と空間的地理的な相互作用の原理とが交差する一つの状況において、思考と行為の統合的機能が働き、習慣の原理と探究の原理が融合する。われわれが経験する連続的なこれら一つ一つの状況は、習慣の原理に基づいた性向・素質の支配する諸判断の継続的更新のプロセスと、同時にそれら性向・素質の含む主観的要因のみの判断では決して充分ではないとする人間知性の統合的機能による「探究」の原理が別のプロセスとして働くのである。これら習慣と探究の両プロセスとすれば、二つの分離した機能のようで、実は表裏一体の融合したものである。探究的思考の全く働かない習慣というものは考えられない。逆に習慣の原理の影響を全く受けない「探究」の過程などは考えられない。そこには程度の違いがあるだけである。程度の違いとは、探究の原理が機能する色彩が習慣の原理よりも濃く色づけられる場合があり、逆に探究の原理より習慣の機動力の方が断然優位を占める場合がある。普通は、習慣がある場面で破綻をきたしたり、バランスを失ったりすると、探究的な思考作用が発生すると考えられる。思考作用と習慣とが全く分離的に把握されて、一方の習慣が問題的危機に陥って始めて他方の思考が発生するとみられるのは、習慣と思考、行為と自我、行為と思考、行為と性向などの同一性が理解されていないことの現われである。デューイのいう「自我と行動との道徳的統一性」(the moral unity of self and action)の立場は連続性の原理を根底に捉えているので、探究の論理的プロセスと習慣の機能との統一の働きを認識しなければならない。そのような前提をわきまえた上で習慣

の過程からどのようにして思考作用がそれとして新たに発生し得るのかを考察する必要がある。

或る日私が久しぶりに海岸を少し遠くまでランニングしたときの状況を設定して、習慣と思考作用の関係を吟味しよう。松林の間を通り抜け、浜辺の白砂の上を快よく走っている間は問題はない。時々走ると私の習慣の一部なのである。その日ランニングとしては珍しく始めてのコースを遠くまで足を伸ばしていた。すると突然海にそいでいる小川に出くわした。「不確定の状況」この小川を越えて更に走りたい私にとって、この小川をどの様にして渡ることが問題となった。川の中は、五米以上あり跳び越えることも出来そうにないし、その深さは私の胸位までありそうで流れに足を入れることも出来ない。而も川中は少し上流の方まで変わらず狭まっていなない。しかし此の程度の小川で、もっと先きまで走りたい私の衝動ないし願望を挫折させたくない。ではどの様にこの小川を渡るかが私の当面する「問題的状况」となった。即ち習慣の連続性は切断され、この状況が含む具体的諸条件に関して思考作用が発生した。即ち「探究」の方法が開始された。川の中、深さ、上流での川巾、私の体力と跳躍力、水温の低さ等々さまざまな条件が思考の材料となる。このままでは川を渡ることが出来ない。ここで欲求・衝動ないし目的を放棄して引き返すことは易しい。問題的状况は一挙に解消する。しかし川を越えて更に走りたい欲求・衝動自体は厳然として崩れない。もし人が何故その川を無理してまで越えて行きたいのか、その目的は何かと問うかも知れない。理由は無い。この状況における目的は健康でもなければ、ただ走ることにのみでもない。唯今まで通り同じ方向を指して走ることが目的である。従って健康が目的で走ることが手段であるならば、方向転換して引き返してもよいではないかという論理は成立しない。とすれば、この「状況」が問題的で不確定であることに変わりはない。水に入らないで如何にして此の小川を渡るかが、「問題設定」となる。私は状況の含む多様な事実を判断し、小川の周辺を観察する。何か解決の手がかりは無いのか。事実を蒐集し観察している内に、かなりの太さの丸太の棒を発見する。私はその棒が小川の中以上にあり、私の体重を支えるのに充分であると推量する。「問題解決の決定」この丸太の棒を小川に架けてやれば多分私は無事に向う側へ渡れるものと推定する。「推論」推論の結果、私はこのアイディアを実践するため可成り重いこの棒を引き

ずって苦心して小川に架け、身体のバランスをとりながら結局上手く小川を渡ることが出来た。「確定した状況」当初の目的・欲求は実現し再び習慣の更新の連続性は回復された。

この状況設定による探究構造の解明で把握せられた様に、或る習慣のプロセスにおいて問題の状況が発生すると、新しくこれまでと違った解決的行為（仮説）が要求され、思考作用が介入してくる。それは或る一つの習慣の部分的修正ではなく、当の習慣全体が疑問に付され、解決を迫り、場合によっては方向転換を余儀なくされる程の全体的なものである。「探究」的思考の出現が、問題の性格を明確にし、自我の解決的行為を求めているから、問題解明のため生じた現実的思考をしなればならない。探究的思考は具体的行動の成果を不可欠とする。それはテストされ、行為の実験的検証を求められている。ランニングをしていて小川の出現によって問題的状况となり、思考は開始された様だが、実際にはそれ以前にも思考は絶えず働いている。例えば走りながら考える、松の木は皆んなどうして人が踊っている様によく曲がり安いのは何故か。その日、体調がいつもより悪かったのは何故か。前夜の就寝時間に原因があるのではないだろうか。更にもし野犬が不意に跳び出してきたらどうするか。……等々。これらはランニングの途中で問題的に意識され吟味されるがしかし解決的行為の推理までは発展させ得ず途中で放棄したり消失したりする。それらは「実験的行為による検証」までは到らない。この意味で普段、習慣は思考に支えられ、行為は思考と統一されているが、こと改めて習慣が破られて思考作用が起ころという際の思考は、探究的思考として実験的検証を求められている点において現実性、実験性、器具性が問われていることである。換言すれば、習慣が一応バランスを保持しつつ軌道に乗って回転している間は、思考作用が同時に働いていても、それが実験的検証を必要としない限り真にトータルな意味で思考とはいえない。

デューイは『論理学』（1938, *Logic: the theory of Inquiry*）において探究の現実的基盤を生物学的側面と文化的な側面から論述している。生物学的側面としての探究の基本構造は、生物有機体としての人間と環境とのバランスのメカニズムが絶えず連続的に更新され、バランスが崩れたときは、その回復を、バランスが保持されているときは更に更新の連続をはかる

ことにある。たとえば呼吸作用は酸素と炭酸ガスの含有量の交換が肺のなかで行われるが、それは循環する血液と炭酸ガスとの相互作用に依存している。生命活動とは、このバランスの維持と更新のことであるが、或る活動内のバランスが乱されると、欲求から追求が始まり、追求の結果が充足に至るといふパターンを歩む。「実際、生きるということは、不均衡と均衡回復の絶えざるリズムである」とみなしてもよい」²²⁾ 飢えは統一の有機体的要素と環境的要素の不均衡の姿である。このアンバランスは或る緊張状態を起こすが、そこに統合の回復をはかろうとする探究活動が始まるのである。この緊張状態が欲求を規定し、その充足のための活動がなされるが、活動は更に環境を変え、それにつれて新しい欲求が生まれ、それを満たす有機体の活動が更に変化するという連続のプロセスが進展する。

探究の現実的基盤は文化的側面からも捉えられる。即ち生物有機体と環境との相互作用の段階より一層豊かな人間同志の関係における諸問題であり、道具、技術、伝統、習慣的信念という全ての文化的な問題との関係である。人間は生物学的要因のみによって決定されるのではなく、多様な文化的条件の影響によって変化を受けるものである。人間とは、有機体的行動から知的行動への「転化そのもの」(the transformation)である。文化的な環境づくりの上で特に重要なのは言語である。デューイは言語が生物学的段階から一層広く且つ深い知的段階や潜在的論理的段階への発展の道具となるとして、その機能を分析するのである。

デューイはこうした「探究」の基本的前提を吟味した後で、探究概念の総括的定義を試みようとする。「探究」の定義はいくつか有るが、ここでは代表的なものを一つ挙げておきたい。²³⁾

「探究とは、不確定な状況を確定した状況へ、即ち始めの状況を構成している諸要素を統一された全体へ変えてしまう程、構成要素の区別や関係が確定している状況へ、コントロールされ方向づけられた仕方で変換することである」²⁴⁾ 即ち探究とは不確定状況において古い習慣と新しい衝動とが衝突して、不安定な、バランスの崩れた状況に発する。それがやがて新しい衝動・欲求を軸にして探究の発展段階を経過するうちに習慣の再組織・再修正を導き「統一された全体」(Unifed Whole)に

至ることである。

このような探究の総括的定義に続いて、探究の構造が吟味されなければならない。探究の発展的構造は次の六段階に分けられる。

- ① 「不確定状況」「問題的状况」
- ② 「問題設定」
- ③ 「問題解決の決定」「仮説」
- ④ 「推論」
- ⑤ 「行動による仮説の検証」
- ⑥ 「保証づきの言明可能性」²⁵⁾

この様な探究のプロセスを通して、最初の問題的状况の客観的事実が観察によって摘出され、それらの諸事実を基にして解決的観念又は仮説を推理するのである。最終的推論(Reasoning)による仮説の選択は、道徳的判断の最も緊迫した予測性と実験性を含むものである。探究の基本構造においては、状況の含む「諸事実」(Facts)とそれらに基づく「諸観念」(Ideas)の形成とは相関的で不可欠な要因である。前者は観察に基づき、後者は推理力に基づく。

以上のような探究の論理学的分析を経て、我々はデューイの習慣と探究との融合地点へ戻らなければならない。問題的状况における道徳的判断の形成に習慣の原理と探究の原理はどのように融合し調和するだろうか。

〔三〕道徳的判断の問題

デューイ道徳論の特徴は、自然科学に適用される「探究」の方法が、道徳にも同じように採用されることである。この探

究の方法は客觀的事態の把握と、それに基づく仮説の推理が軸となり、その仮説を実験的検証に付すことによつて最終的評價が下されるところにあった。ここでは科学の思考方法としての実験的検証性が眞理の基準として不可欠な前提とされた。デューイは、この探究による検証性の論理を道德的生活にも採用すべきだと考えた。われわれは彼の探究の論理が果してどの様に道德的判断の成立に介入するのかを考察したい。即ち道德的状况において、習慣の本質的要因としての性向・素質が、探究の發展的諸段階における特徴とどの様に接触・融合して一つの道德的判断が成立するのか、この点を考察の狙いとしたい。

先ず道德的状况の特徴とは何であろうか。普通に状況といへば「われわれが事象についての判断を形成するには、それらの孤立状態においてではなく、脈落全体 (a contextual whole) との関連においてである。この脈落全体が状況と呼ばれる」²⁶⁾ 状況とは、個人が自然的・社会的環境との間に経験する場、時間的且つ空間的に経験が成立する一つのまとまった質的場面である。即ち時間的「連続性」の原理と空間的「相互作用」の原理が交差するところである。デューイが「道德的状况」と呼ぶとき、それは「眼に見える行為に先立つて判断および選択が要求されるような状況のことである」²⁷⁾ 各々の道德的状况はユニークな問題を含んでいるから、その状況にふさわしい判断及び選択が行われねばならない。換言すれば道德的状况は未解決な事態であり、この混乱し不安定な内容を帯びた状況を、探究的思考とその実験的行為によつて「統合の回復」(Recovery of Integration) をはかるところに道德的行為の意義が生まれる。その際思考作用の全過程が一連の判断を形成しているが故に、道德的状况の解決は、道德的判断の在り方に全てかかっているといえる。デューイは「道德的判断とは、判断される事態と、判断する行為の中にあらわれる性格や態度との絶対的に相互決定を行う判断である」²⁸⁾ と規定しているが、これは判断決定の内容がパーソナルな要因と客觀的な要因との相互的関わりに基づくものであることを意味する。即ち個人の習慣・性向・素質の側面と、状況の客觀的事実の側面との相互決定性を重視するのである。この相互決定性 (reciprocal determination) とはどの様な意味か吟味してみよう。

問題の道德的状况を解決へ導くには、探究の論理に従つて状況の含む事実を観察せねばならないし、それらを基にして諸

観念（仮説）を推理しなければならないが、事実や観念が妥当なものと確認するのは判断作用に基づくのである。そこには事実判断と価値判断とが統合的に働いていると考えられる。何故なら状況を解決へ導く行為の推理には、諸事実（データ）の蒐集における事実判断と、それらの事実を基に問題解決の方法を選択する価値判断が行われているのである。価値判断について「それは、常に何がなされるべきかを決定するためにあること」或いは「あたかも行動したかの様に、それがある行動のコースを促進するにあたって作用するその仕方を尋ねること」²⁹⁾なのである。探究の全過程にわたって価値がはたらいっていることは明らかであるが、実はこうした価値判断の機能は何を基盤にしているかと問えば、再び習慣論の問題に戻ってくる。「価値判断とは、われわれの願望、情感、喜びの形式を支配すべきことならについての判断である。何故なら、願望、情感、喜びの形式を決定するのは全て、われわれの個人的社会的行為の主要動向を決定するのが常だからである」³⁰⁾価値判断の機能が個人の願望・欲求・喜びを土台にしていることが分るが、これら願望・欲求は習慣から構成されたものであり、性向・素質と深く関係を結んでいるから、価値判断の究極的決定要因は個人が営む習慣の構造上の特性にあることが理解され得る。判断の重要な特質は、選択であり、拒否である。そして状況の含む諸事実の選択、仮説や観念の選択、最終的仮説ないし観念の推理と選択などが、判断する当事者の優秀な判断力に全て帰するのである。即ち判断者は「紛糾錯綜した事態がもつ特性の関係を表示し、意味する価値に関する勦を働かせることである」³¹⁾。

つまりデューイによれば、状況の客観的事態も探究のプロセスにおいて絶えず判断作用によって影響を受け、事実判断と同時に価値判断が含まれるが、それらは判断する当事者の判断能力に係っており、究極的には習慣によって形成された性向・素質の要因に依存せざるを得ないことである。この判断力の核心には、性向・素質 (Disposition) の本質としての「情緒的感得力」(emotional sensitiveness) があり、これが判断作用に多大な影響力を及ぼしているものと思われる。「熟慮に現われる推進力的活動力の釣合いのとれた配置は、敏感で均斉のとれた情緒的感得力によって決まる」この情緒的感得力こそが道徳的場面のユニークな性格を感じ取り、問題の本質と構造を洞察し、状況が含む様々な諸事実を観察し蒐集するの

に影響する。諸事実の観察と蒐集の方法は、あくまで科学的思考の方法ではあるが、或る事実の蒐集が問題解決に役立つか否かを決める判断は、価値判断である。

例えば、先きのランニングの状況設定から考えると、小川の巾、水深、上流の巾、私の跳躍力など、これらの確認は、科学的客観的判断が求められる。同時に水の汚染度や空の色、松林の表情などは、川を渡ろうとする行為（目的）の実践に直接関係がないことが判断されるであろう。事実判断の対象を選択するのに価値判断が含まれている。価値とは、「諸関係の洞察によって導かれた行為から生ずる享受（満足、快等）」は、それらが経験されるところの方法に従って意味と妥当性を有する」ことである。即ち価値とは、探究の方法に従って結果的にもたらされた満足感や快感によって決まるものであり、価値判断は、それらを予測的に把握する判断である。価値が満足や快という主観的情緒に基づく以上、探究の過程における様々な価値判断が、判断者の性向・素質の情緒的感得力に依存することが理解せられるであろう。

以上の論点から結論的にいえば、道徳的判断は、問題的状况の客観的解決を求める探究の発展段階において、習慣のパースナルな性向・素質の情緒的感得力によって影響を受け安い。探究から導かれた科学的客観的諸事実の判断や解決方法の仮説或はアイディアの選定にあたっては価値判断が含まれるが、それら双方の判断は、共に行為のベストな解決を求める判断の中に統合化されてしまうのである。

註

- (1) John Dewey: Human Nature and Conduct, 1922. Modern Library 版 1957, P. 50.
ここで *Adjustment* (適応) を使っているが、総括して *Working Adaptation* (作業的適応) の概念は一層根源的である。この「環境に対する調整」は自己更新を、「環境の調整」は環境的条件の改造・刷新を意味する。
- (2) John Dewey: Experience and Education, 1938, Macmillan Co. 版, 1972, P. 28.
デューイ教育論の根本的主張の一つは、「経験の質」(quality of Experience) を如何に改良するかにある。そこから習慣論が中心

となる。

- (3) Ibid., P. 35, ここでは「生長の連続性 (Continuity of Growth)」が「経験の連続性 (Continuity of Experience)」と統合的に捉えられる。
- (4) J. Dewey: *Human Nature and Conduct*, P. 163,
- (5) Ibid., P. 91, 衝動の可塑的特性の定義。
この問題については次の論文を参照されたし (拙論)
「J・デューイ習慣論における衝動の可塑性について」
(日本デューイ学会紀要・第二十号、一九七九)
- (6) Ibid., P. 87,
- (7) Ibid., P. 26, デューイは Disposition (性向) の語を盛んに使うが、Predisposition (素質) や Attitude (態度) も同義語である。
- (8) Ibid., P. 32,
- (9) Ibid., PP. 40—41,
Sensitiveness を強いて「感得力」などと訳したのは、「感受性」では弱過まで、Sensibility とは違出し、「鋭敏な」「感度を」では少し物足りないからである。もっと積極的な力を意味している。
この引用文は習慣論の核心にある「性向」の本質を論述した部分。
「J・デューイ習慣論に於ける Disposition の位置」(拙論) を参照されたし。
(日本デューイ学会紀要・第十九号、一九七八)
- (10) Ibid., P. 40,
- (11) Ibid., P. 40,
- (12) Ibid., PP. 169—170, 衝動についての定義。デューイ習慣論は結局「衝動の調整」(Mediation of Impulse) に全てが絞られる。
M. Schlick (モーリッツ・シュリック) が「倫理学の諸問題」の中で衝動を性向と混同してしまっているのは、デューイから論ずれば、おそらく大変な誤りであろう。城戸寛訳 (亜紀書房) 52頁～54頁、シュリックは、カントの「傾向性」の語を「衝動」の

代わりに用いたことをほめながら、シュリック自身は衝動と性向・素質をデュロイと全く逆に解釈している。(53頁)

- (13) Ibid., P. 87,
 (14) Ibid., Pp. 87-88,
 (15) Ibid., P. 92,
 (16) Ibid., P. 99, 衝動の固定化と放任化との中間に衝動の適切な調整の場を考えている。衝動は固定的になった習慣と、自然のままの放任にされた習慣の中間にあつて、両領域の各れにも属し得るが、又属し得ないことも出来る。
 (17) Ibid., P. 99, 衝動の固定化の帰還するところは、創造化と対極するところ、即ち死である。衝動は習慣に新鮮な生命を吹き込む。
 (18) Ibid., P. 146,
 (19) Ibid., P. 146,
 (20) Ibid., P. 146,
 (21) Ibid., P. 158,
 (22) John Dewey: Logic, 1938, Henry Holt and Company, 一九五五年版 P. 27,
 「探究」(Inquiry)の定義については、拙論「J・デュロイの探究思考の問題点」(九大・哲学論文集・第八輯所収)を参照されたし。
 (24) 「探究」の構造としての各段階の詳しい説明は右の論文にあるので、ここでは省略。
 (25) 探究の六つの発展段階、(各テキストの比較)

【思考の方法】	一九一〇年	暗示	知性的整理	仮説	推論	テスト	未来への眺望
【民主主義と教育】	一九一六年	未完成の状況	推測的予想	吟味	推敲	テスト	知識
【倫理学】	一九三八年	不確定状況	問題設定	問題解決の決定	推論	テスト	保証された言明

- (26) J. Dewey: *Logic*, P. 66,
- (27) J. Dewey: *Reconstruction in philosophy*, 1920, Beacon Press, Boston, 一九五七年版 P. 163,
- (28) J. Dewey: *Problems of Men*, 1946, Greenwood Press 社版, 1968, P. 233,
- (29) J. Dewey: *Essays in Experimental Logic*, 1916, Dover Publications, P. 361,
- (30) J. Dewey: *Quest for certainty*, 1929, Capricorn Books 版, 一九六〇年版 P. 267,
- (31) J. Dewey: *How We Think*, 1910, D. C. Heath and Company. 一九三三年版 P. 123,
- (32) J. Dewey: *Human Nature and Conduct*, P. 186,
- (33) J. Dewey: *Quest for certainty*, P. 267,

(福岡工業大学助教授 昭和三十七年本学卒業・倫理学)